

壱岐勝本方言の複合名詞アクセント

— 後部要素が1拍名詞の場合の複合規則仮説 —

The Accent of Compound Nouns in the Iki Katsumoto Dialect of Japanese

池田史子
Fumiko IKEDA

0. はじめに

日本語諸方言の複合名詞のアクセント規則については、近年ようやくその概略が明らかになりつつあり、複合規則による諸方言の分類も始められている。複合名詞の前部要素をX, 後部要素をY, それによって構成される複合名詞をZとするならば、その複合規則は、大まかに言って、

「前部要素決定型」(X型)

「両要素関与型」(XY型)

「後部要素決定型」(Y型)

に分けられる。(上野1997) また、その「要素」はもっと広い観点からアジア諸言語をも含めて、声調であったりいわゆる核アクセントであったりすると言う。(早田1999)

さて、日本語諸方言のアクセントについての報告は、ほぼ面として出揃い、その系譜まで明らかになったようにも見えるが、それは体系比較の容易さから所謂2拍名詞についてのみでしかなかった。東京方言を除くならば、3拍語以上のアクセントについて体系的に報告されたものはごくわずかしかない。

筆者も母語である壱岐諸方言のアクセントについての報告を行ったことがあるが、2拍名詞の分類により壱岐方言を3つの区画に分け、筑前式方言の一環としてとらえるということのみ止まっていた。(奥村・中上1991)

本稿では、まず、壱岐方言の中でも最も北部に位置する勝本方言の1~5拍語の名詞アクセント体系について確認し、その後、1~3拍名詞を複合語の構成要素とした場合の複合名詞のアクセント規則について述べたいと思う。勝本アクセントで発話する3名の被調査者の資料に

基づき、筆者の内省も含まれる。

アクセントの記述方法は、次のように行う。

高音拍部 H (視覚を重視した場合は, ●)

低音拍部 L (視覚を重視した場合は, ○)

上がり目 [

下がり目]

複合語の前部要素 X

複合語の後部要素 Y

複合語 Z (Z=X+Y)

拍を後ろから数える場合は、-で表記する。

1. 名詞のアクセント体系

壱岐勝本方言の名詞のアクセントには次のような型が現れる。各アクセント型の下の()付き数字は、今回の調査における出現語彙数である。

1拍名詞 [H]

(42)

2拍名詞 [H]L, L[H]

(281) (148)

3拍名詞 L[H]L, [H]LL, L[HH]

(1) (180) (114)

4拍名詞 [H]LLL, L[H]LL, L[HHH]

(8) (56) (39)

5拍名詞 L[HH]LL, L[HHHH]

(34) (4)

1拍名詞は、すべて常に高く発音される。助詞「が、で、に、から、より」等(以下、「助詞Aグループ」と称する)は常に低く接続し、助詞「ん(「の」の転)、だけ、ばかり」等(以下、「助詞Bグループ」と称する)は直前の拍と同じ高さに接続する。

2拍名詞は、単独では、所謂金田一語類のう

ち主に第1類・2類・4類・5類が[H]Lに発音され、主に第3類がL[H]に発音される。助詞Aグループは常に低く接続し、助詞Bグループは直前の拍と同じ高さに接続する。

3拍名詞は、単独では、所謂金田一語類のうち主に第1類・2類・3類・5類・6類・7類が[H]LLに発音され、主に第4類がL[HH]に発音される。助詞Aグループは常に低く接続し、助詞Bグループは直前の拍と同じ高さに接続する。3拍名詞は、この2型で成り立っているのであるが、1単語だけ、L[H]L(単衣)と発音されるものもあった。この単語に関しては、L[H]Lと[H]LLの間で揺れているように感じられる。この場合も助詞Aグループは低く、助詞Bグループは直前の拍と同じ高さに接続する。

4拍名詞のうち、「秋風、朝顔、足音、色紙、木苺、気心、毛虱、小刀、・・・」のグループは、L[H]LLと発音され、「五日目、犬小屋、表地、鰹菜、狛犬、米糠、魚屋、父親、・・・」のグループは、L[HHH]と発音される。4拍名詞の大半はこの2つの型に属するのだが、今回の調査語彙のうち、「猪、鹿児島、数学、友達、鶏、人参、巻き寿司、目薬」の8単語が[H]LLLと発音された。この8単語に共通する音声的特徴の有無は今の段階では明らかでないし、これを例外と見なすべきであるかどうかはわからない。

4拍名詞の場合も、助詞Aグループは常に低く接続し、助詞Bグループは直前の拍と同じ高さに接続する。

5拍名詞は、「小豆粥、頭数、雨蛙、石頭、鶉豆、鱗雲、米麴、山嵐・・・」等、そのほとんどがL[HH]LLと発音されるのだが、「鰹節、夏休み、春休み、冬休み」の4語はL[HHHH]と発音された。そのうち「夏休み、春休み、秋休み」3語に関しては、L[HHHH]とL[HH]LLの間で揺れているように感じられる。「鰹節」についてはわからない。助詞Aグループは常に低く接続し、助詞Bグループは直前の拍と同じ高さに接続する。

L[H]Lや[H]LLLのように、所属語彙が少なく再考を要する語を除いて、1～5拍語をまとめてみると、アクセントの下がり目が後ろから1拍目にあるグループと(－①と表記する)、ア

クセントの下がり目が後ろから3拍目にあるグループ(－③と表記する)に分けることが出来る。後に述べる複合名詞Zの型にも共通のことである。

－①のグループ

[H], L[H], L[HH], L[HHH], L[HHHH]

－③のグループ

[H]L, [H]LL, L[H]LL, L[HH]LL

2. 複合名詞のアクセント規則

それでは、このような基本アクセント型を組み合わせて作られる複合名詞には、どのような規則が存在するのであろうか。本稿では、 $X \leq 3$ 拍、 $Y \leq 3$ 拍、 $Z \leq 5$ 拍として構成される複合名詞のアクセント規則について、具体的に例を挙げながら考えることとする。

2.1 Y=3の場合(用例【表1】～【表6】)

3拍名詞には、先に述べたようにL[HH]と[H]LLの2種類の型が存在する。それぞれを後部要素Yとして、前部要素Xの各アクセント型と組み合わせると次のような複合名詞Zが構成される。(表1～20において、*はその組み合わせの用例としては例外となる語。)

【表1】

読み	漢字	X+Y	Z=－③
キイチゴ	木苺	H・HLL	LHLL
キゴコロ	気心	H・HLL	LHLL
コダヌキ	子狸	H・HLL	LHLL
コヒツジ	子羊	H・HLL	LHLL
コムスメ	小娘	H・HLL	LHLL
ハザクラ	葉桜	H・HLL	LHLL
メグスリ	目薬	H・HLL	HLLL *
メジルシ	目印	H・HLL	LHLL
ユケムリ	湯煙	H・HLL	LHLL
ヨカグラ	夜神楽	H・HLL	LHLL

【表2】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
アマガエル	雨蛙	HL・HLL	LHHLL
カザグルマ	風車	HL・HLL	LHHLL
カタグルマ	肩車	HL・HLL	LHHLL
キタマクラ	北枕	HL・HLL	LHHLL
ゴマアブラ	胡麻油	HL・HLL	LHHLL
ヤエザクラ	八重桜	HL・HLL	LHHLL
ユキヤナギ	雪柳	HL・HLL	LHHLL

【表3】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
ヤマアラシ	山嵐	LH・HLL	LHHLL
ヤマザクラ	山桜	LH・HLL	LHHLL

【表4】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
ケジラミ	毛虱	H・LHH	LHLL
コガタナ	小刀	H・LHH	LHLL
コダカラ	子宝	H・LHH	LHLL
コツツミ	小包	H・LHH	LHLL
ジアマリ	字余り	H・LHH	LHLL
テカガミ	手鏡	H・LHH	LHLL
ヤオモテ	矢面	H・LHH	LHLL

【表5】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
イシアタマ	石頭	HL・LHH	LHHLL
ゴマドウフ	胡麻豆腐	HL・LHH	LHHLL
ムギコウジ	麦麴	HL・LHH	LHHLL

【表6】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
コメコウジ	米麴	LH・LHH	LHHLL
ニクウドン	肉饅頭	LH・LHH	LHHLL

Y=3の場合、Xのアクセント、Yのアクセントに関わりなく、そして、Zの拍数にも関係なく、構成される4拍および5拍の複合名詞は常に③となることわかる。

表1の場合の「目薬」だけが、その複合規則の例外となっている。また、名詞のアクセント体系の枠組みからも外れている。

2. 2 Y=2の場合

2. 2. 1 Y=2の場合のうち、X=3の場合 (用例【表7】～【表10】)

複合名詞の後部要素Yが2拍の場合のうち、

前部要素Xが3拍の場合、つまり構成された複合名詞Zが5拍の場合は、つぎのようなアクセント型となる。

【表7】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
ウロコグモ	鱗雲	HLL・HL	LHHLL
クスリバコ	薬箱	HLL・HL	LHHLL
ダンゴジル	団子汁	HLL・HL	LHHLL
チカラコブ	力瘤	HLL・HL	LHHLL
ヒガシカゼ	東風	HLL・HL	LHHLL
ミナミカゼ	南風	HLL・HL	LHHLL
ミヤコドリ	都鳥	HLL・HL	LHHLL
ヤナギゴシ	柳腰	HLL・HL	LHHLL

【表8】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
アタマカズ	頭数	LHH・HL	LHHLL
カタナカジ	刀鍛冶	LHH・HL	LHHLL
カンナクス	鉋屑	LHH・HL	LHHLL
クツワムシ	轡虫	LHH・HL	LHHLL
タキギノウ	薪能	LHH・HL	LHHLL

【表9】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
アズキガユ	小豆粥	HLL・LH	LHHLL
カツオブシ	鯉節	HLL・LH	LHHHH *
サクラダイ	桜鯛	HLL・LH	LHHLL
ヤナギダル	柳樽	HLL・LH	LHHLL

【表10】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
ウズラマメ	鶉豆	LHH・LH	LHHLL
オモテウラ	表裏	LHH・LH	LHHLL
ハダカガネ	裸金	LHH・LH	LHHLL

Y=2の場合のうち、Xが3拍であれば、Xの[H]LL, L[HH]に関わりなく、また、Yの[H]L, L[H]に関わりなく、構成される5拍の複合名詞は常に③となることわかる。

表9の場合の「鯉節」だけがその複合規則の例外となっている。

これまで見てきた組み合わせのうち、出来上がった複合名詞Zが5拍であれば、常に③となっている。

2. 2. 2 Y=2の場合のうち、X=2または

X = 1 の場合 (用例【表11】～【表16】)

複合名詞の後部要素 Y が 2 拍の場合のうち、前部要素 X が 1 拍または 2 拍の場合、つまり構成される複合名詞 Z が 3 拍または 4 拍の場合は、次のようなアクセント型となる。

【表11】

読み	漢字	X+Y	Z = -③
コウシ	仔牛	H・HL	HLL
コドモ	子供	H・HL	HLL
コトリ	小鳥	H・HL	HLL
セナカ	背中	H・HL	HLL
ナマエ	名前	H・HL	HLL
ヒバシ	火箸	H・HL	HLL

【表12】

読み	漢字	X+Y	Z = -③
アキカゼ	秋風	HL・HL	LHLL
アサガオ	朝顔	HL・HL	LHLL
アマガサ	雨傘	HL・HL	LHLL
イシバシ	石橋	HL・HL	LHLL
キリサメ	霧雨	HL・HL	LHLL
クロウオ	黒魚	HL・HL	LHLL
コナユキ	粉雪	HL・HL	LHLL
ニワトリ	鶏	HL・HL	HLLL *
ハイザラ	灰皿	HL・HL	LHLL
ハツユキ	初雪	HL・HL	LHLL
ハナイキ	鼻息	HL・HL	LHLL
ハルサメ	春雨	HL・HL	LHHH *
フデバコ	筆箱	HL・HL	LHLL

【表13】

読み	漢字	X+Y	Z = -③
アシオト	足音	LH・HL	LHLL
イロガミ	色紙	LH・HL	LHLL
クチベニ	口紅	LH・HL	LHLL
クツシタ	靴下	LH・HL	LHHH *
ゴミバコ	ゴミ箱	LH・HL	LHLL
タマネギ	玉葱	LH・HL	LHLL
ハカイシ	墓石	LH・HL	LHLL
ハナヨメ	花嫁	LH・HL	LHLL
ミズウミ	湖	LH・HL	LHLL
ヤマドリ	山鳥	LH・HL	LHLL

【表14】

読み	漢字	X+Y	Z = -①
キイロ	黄色	H・LH	LHH

コヤマ	小山	H・LH	LHH
スアシ	素足	H・LH	HLL *
マギワ	間際	H・LH	LHH
マミズ	真水	H・LH	LHH

【表15】

読み	漢字	X+Y	Z = -①
コマイヌ	狛犬	HL・LH	LHHH
チチオヤ	父親	HL・LH	LHHH
ナカユビ	中指	HL・LH	LHLL *
ハハオヤ	母親	HL・LH	LHHH
モチゴメ	餅米	HL・LH	LHHH

【表16】

読み	漢字	X+Y	Z = -①
イヌゴヤ	犬小屋	LH・LH	LHHH
オキナワ	沖縄	LH・LH	LHLL *
オヤユビ	親指	LH・LH	LHLL *
コメスカ	米糠	LH・LH	LHHH
サトイモ	里芋	LH・LH	LHHH
サトオヤ	里親	LH・LH	LHHH
ミズイロ	水色	LH・LH	LHHH
ミズクサ	水草	LH・LH	LHHH
ミミアカ	耳垢	LH・LH	LHHH

つまり、この場合の複合名詞 Z は、後部要素 Y が [H]L の場合は、X に関わりなく [H]LL, L [H]LL, L[H]LL のように -③ になり、後部要素 Y が L[H] の場合は、X に関わりなく L[HH], L [HHH], L[HHH] のように常に -① となる。この組み合わせの場合の複合名詞 Z は、後部要素 Y によって決定される。

表12の「春雨」、表13の「靴下」、表14の「素足」、表15の「中指」、表16の「沖縄、親指」がそれぞれの複合規則の例外となっている。「中指、親指」については、「人差し指、薬指、小指」が揃って -③ であるという意味上の理由が考えられる。「沖縄」についても、「福岡、長崎、大分、熊本、宮崎」と意味的に近い単語が -③ であることと関係が深いと考えられる。いずれにしても、複合規則としては例外であるが、名詞のアクセント体系の枠組みは出てはいない。

ところが、表12の「鶏」は、複合規則としても例外であるのに加えて、名詞のアクセント体系をも外れて、[H]LLL というアクセント型で発音されている。

2. 3 Y=1 の場合 (用例【表17】～【表20】、【表21】～【表24】)

最後に、Y が 1 拍の場合について見てみたいと思う。

【表17】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
ヤブカ	藪蚊	HL・H	HLL
ハリコ	針子	HL・H	HLL
ハナヂ	鼻血	HL・H	HLL
イタド	板戸	HL・H	HLL
アカミ	赤身	HL・H	HLL
エダハ	枝葉	HL・H	HLL
アサヒ	朝日	HL・H	HLL
クロメ	黒目	HL・H	HLL

【表18】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
イエカ	家蚊	LH・H	HLL
シマガ	繕蚊	LH・H	HLL
オヤコ	親子	LH・H	HLL
サトゴ	里子	LH・H	HLL
アミド	網戸	LH・H	HLL
ウラバ	末葉	LH・H	HLL

【表19】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
ガラスド	ガラス戸	HLL・H	LHLL
コウシド	格子戸	HLL・H	LHLL
アブラミ	脂身	HLL・H	LHLL
モミジバ	紅葉葉	HLL・H	LHLL
マナツビ	真夏日	HLL・H	LHLL
ニハイズ	二杯酢	HLL・H	LHLL
キツネビ	狐火	HLL・H	LHLL

【表20】

読み	漢字	X+Y	Z=-③
カヨウビ	火曜日	LHH・H	LHLL
キネンビ	記念日	LHH・H	LHLL
コハルビ	小春日	LHH・H	LHLL
トクイビ	特異日	LHH・H	LHLL
ドヨウビ	土曜日	LHH・H	LHLL

【表21】

読み	漢字	X+Y	Z=-①
カタミ	肩身	HL・H	LHH
カゲエ	影絵	HL・H	LHH
ソバコ	そば粉	HL・H	LHH

ヒトデ	人手	HL・H	LHH
カキネ	垣根	HL・H	LHH
スソノ	裾野	HL・H	LHH
ヒトメ	人目	HL・H	LHH

【表22】

読み	漢字	X+Y	Z=-①
ホネミ	骨身	LH・H	LHH
スミエ	墨絵	LH・H	LHH
ドロエ	泥絵	LH・H	LHH
コメズ	米酢	LH・H	LHH

【表23】

読み	漢字	X+Y	Z=-①
フスマエ	襖絵	HLL・H	LHHH
ヒョウシギ	拍子木	HLL・H	LHHH
リングス	リング酢	HLL・H	LHHH
カツオナ	鯉菜	HLL・H	LHHH
カシワデ	柏手	HLL・H	LHHH
ココロネ	心根	HLL・H	LHHH
ナミダメ	涙目	HLL・H	LHHH

【表24】

読み	漢字	X+Y	Z=-①
アシタバ	明日葉	LHH・H	LHHH
ウドンコ	うどん粉	LHH・H	LHHH
サカイメ	境目	LHH・H	LHHH
ハヤリメ	流行目	LHH・H	LHHH

Y=1 の場合の複合規則について考察する前に確認しておくべきことは、現在の当該方言の 1 拍名詞のアクセントの型は、[H] の 1 種類のみであるということである。単独では、型の区別が現れることはない。しかし、ここに、1 拍名詞のアクセントが 1 種類の型に統合される以前の、一世代前の 1 拍名詞における 2 種類のアクセントの区別を想定するのである。ひとつは所謂金田一語彙等における第 1・2 類由来の * [H]L、もうひとつは第 3 類由来の * L[H] である。この * [H]L と * L[H] を、後部要素 Y=2 拍の名詞と同じように扱った場合の、複合名詞 Z の姿を想定してみよう。Y=* [H]L の場合、複合名詞 Z は常に -③ となり、Y=* L[H] の場合、複合名詞 Z は常に -① となるはずである。

そういう観点から、1 拍名詞を後部要素 Y として持つ複合名詞を見てみると、出来上がった

複合名詞 Z が-③型である表17~20の後部要素 Y には、第1・2類由来の語が多く分布している。表17の「蚊, 子, 血, 戸, 身」は第1類, 「葉, 日」は第2類, 表18の「蚊, 子, 戸」は第1類, 「葉」は第2類。表19の「戸, 身」は第1類, 「葉, 日」は第2類。表20の「日」は第2類。(ただし, 表17の「目」, 表19の「酢, 火」は第3類。)

出来上がった複合名詞 Z が-①型である表21~24の後部要素 Y には、第3類由来の語が多く分布している。表21の「絵, 粉, 手, 根, 野, 目」は第3類, 表22の「絵, 酢」は第3類, 表23の「絵, 木, 酢, 菜, 手, 根, 目」は第3類, 表24の「粉, 目」は第3類。(ただし, 表21の「身」は第1類, 表22の「身」は第1類, 表24の「葉」は第2類。)

5拍語以上の複合名詞でも、後部要素に第2類由来の語が来ると「給料日, 月曜日, 発売日」のように L[HH]LL となり、後部要素に第3類由来の語が来ると「片栗粉, 白玉粉, 引き取り手, 素人目」のように L[HHHH]となる。

現在では、宍岐勝本方言の1拍名詞は、1種類の区別しか持たないけれども、それを後部要素 Y として複合名詞 Z を構成したときには、1拍名詞に2種類の区別を持っていた時代の痕跡が現れるということだろう。1拍名詞は単独ではそのアクセントを保つには短すぎるけれども、複合名詞の中に潜在的にその2種類の区別を保

っていたのである。複合語アクセントの観察によって、1拍名詞の過去の姿を「内的再建」することができた。

単独では型の統合が起こっている方言でも、複合名詞の構成要素となった場合にのみ型の区別の痕跡が現れるという現象は、古くは和田(1943)によって東京方言・近畿方言の2拍名詞について指摘されている。松森(1998), 前田(2000)などにおいても「和田の仮説」として取り上げられ検証されている。また、宍岐勝本方言と同じく1拍名詞についての報告は、木部(2003)がある。屋久島・尾之間方言のアクセント体系も、二型アクセントであるが、1音節語には1種類の型しか存在しない。ただし、これらを前部要素 X に持つ複合語では、2種類の型の区別が現れるという。

3. おわりに

宍岐勝本方言における、 $X \leq 3$ 拍, $Y \leq 3$ 拍, $Z \leq 5$ 拍の場合の、複合名詞アクセント規則をまとめ直すと、表25のようになる。1拍名詞が複合名詞の後部要素 Y となる場合は、想定した一世代前のアクセント型によって分けた。

当該方言の複合名詞 Z は、後部要素 Y によってその型を決定される可言えそうである。複合名詞のアクセント規則は、「後部要素決定型」(Y型)と言える。

【表25】宍岐勝本方言の複合名詞アクセント規則

X \ Y		1拍		2拍		3拍	
		*[●]○	*○[●]	[●]○	○[●]	[●]○○	○[●●]
1拍	[●]			[●]○○	○[●●]	○[●]○○	○[●]○○
	[●]○	[●]○○	○[●●]	○[●]○○	○[●●●]	○[●●]○○	○[●●]○○
2拍	○[●]	[●]○○	○[●●]	○[●]○○	○[●●●]	○[●●]○○	○[●●]○○
	[●]○○	○[●]○○	○[●●●]	○[●●]○○	○[●●]○○		
3拍	○[●●]	○[●]○○	○[●●●]	○[●●]○○	○[●●]○○		

参考文献

上野善道(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」, 杉藤美代子監修, 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫編『日本語音声2アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, pp.231-270

上野善道(2000)「金沢方言の後部1拍複合名詞のアクセント資料」『日本海域研究』31, pp.197-218
奥村三雄・中上史子(1991)「筑前式方言の一環

としてみた沓岐のアクセント—沓岐東部
域を中心に』『久留米大学比較文化研究科
紀要』2, pp.129-148

木部暢子(2003)「屋久島・尾之間方言の調査報
告」科学研究費特定領域研究「消滅する
方言音韻の緊急調査研究」

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研
究原理と方法』塙書房

金田一春彦・和田實(1980)「国語アクセント類
別語彙表」国語学会編『国語学大辞典』
東京堂出版

早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館
書店

前田広幸(2000)「後部に2拍和語をもつ複合名
詞アクセント再考」『現代言語学の射程』
英宝社 pp.65-78

松森晶子(1998)「日本祖語のアクセント」『日本

語学』3, pp.34-44

村中淑子(1999)「類別語彙2拍名詞が後部要素
となった場合の複合名詞アクセントにつ
いて 和田論文と前田論文を杉藤CD-
ROM辞典で検討する」『徳島大学国語国
文学』12, pp.23-33

和田實(1943)「複合語アクセントの後部成素と
して見た二音節名詞」『方言研究』7, pp.1
-26

付記

本稿は、日本方言研究会第76回研究発表会
(2003年5月16日 大阪府立大学)での口頭発
表をもとに加筆・修正したものです。会場でご
助言いただいた多くの先生方に深謝申し上げま
す。

(日本語学)